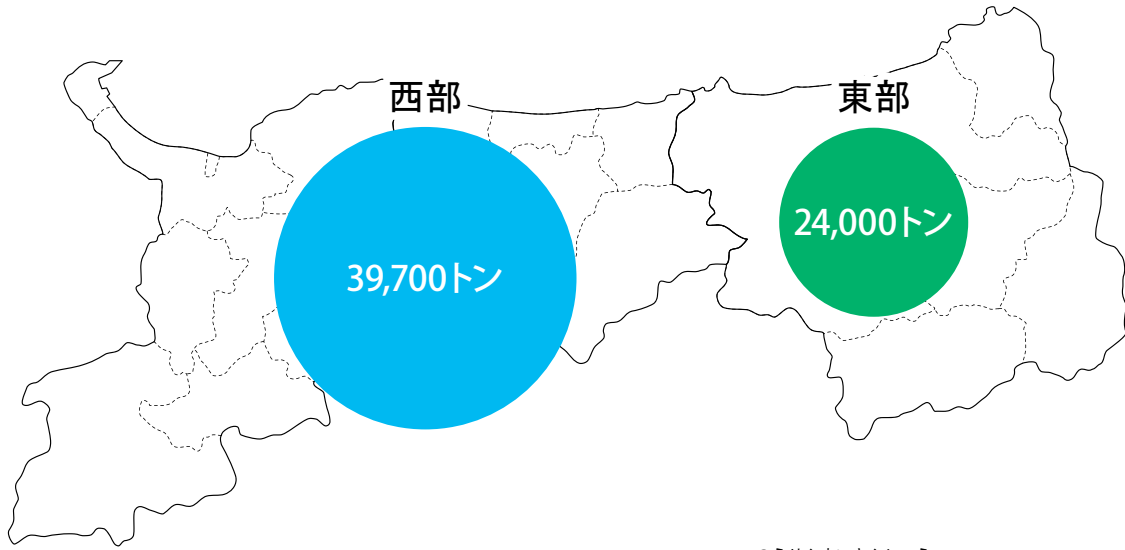


2 米づくりのさかんなところ

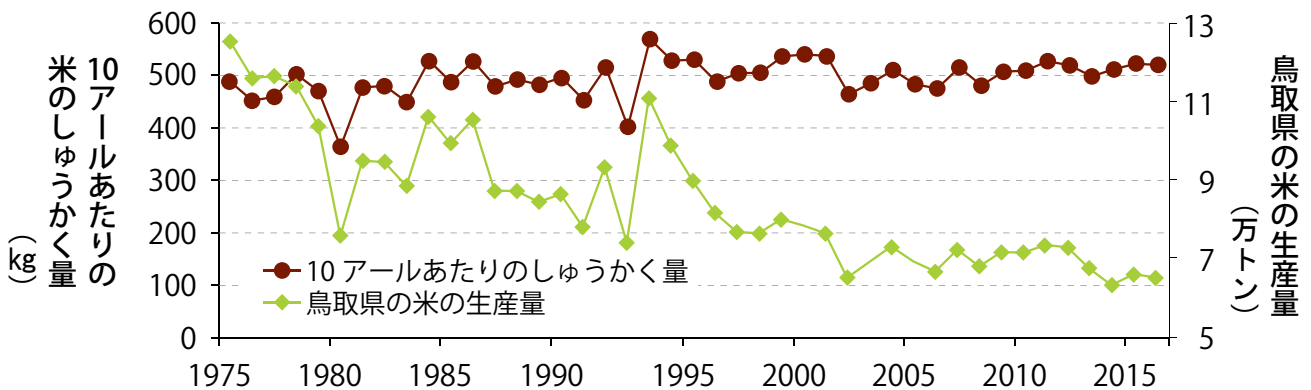
① 鳥取県の米づくりの特色



鳥取県の米のしゅうかく量 [2018年 / 農林水産省]

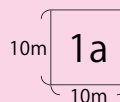
米は、わたしたち日本人の主食です。鳥取県全体で6万4千トンのしゅうかく量があります。鳥取県は人口の少ない県なので、県内で食べきれない米は、京阪神を中心に出荷されています。

また、地域にあった品種や肥料のやり方などを工夫して、10アールあたりの米のしゅうかく量が増えるように努力しています。



10アールあたりの米のしゅうかく量 [2018年 / 農林水産省]

1a (アール)
= 100m² (10m × 10m)



米づくりをしている農家の数は減ってきていますが、大型機械を使って、大きぼな米づくりをしている農家は増えてきています。

全国的に米を食べる量が減ったため、転作（米の代わりに田で大豆や野菜などをつくること）などにより、米の生産量を減らしてきています。同じように、鳥取県の米の生産量も減ってきています。

また、米の輸入が増えていることや米のねだんが下がったことなどが問題となり、県内の米づくり農家も、これらの問題に真剣に取り組む、今後の米づくりについて考えています。

このような中、県内各地で、地域の特色を出した「ブランド米」がつくられています。農薬をあまり使わないようにしたり、おいしい品種をつくったりするなど、生産者がこだわりをもった米づくりをしています。

鳥取県産の米をたくさん食べて、県内の米づくり農家さんをおうえんしよう！



鳥取県産きぬむすめ
マスコットキャラクター
きぬむすびちゃん

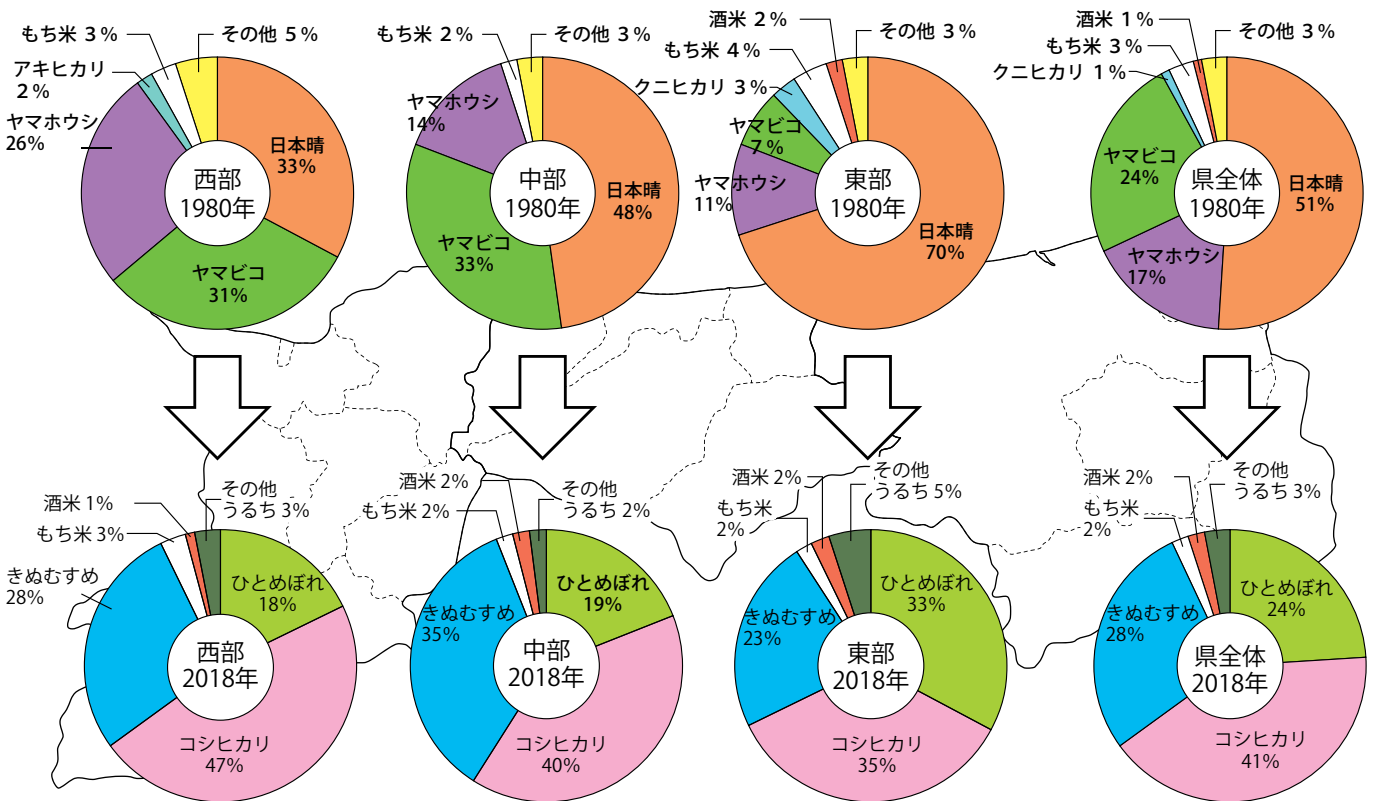


はん売されている米袋のデザインの例

②クローズアップ！米づくり つくられる米の品種の変化

鳥取県でつくられる米は、おいしい品種に変わってきました。

1980年（昭和55年）にはほとんどつくられていなかったコシヒカリ（福井県でつくられた品種）が、今では県内で最も多くなっています。また、ひとめぼれ（宮城県でつくられた品種）も多くなつられており、2つの品種のさいばい面積は県内の61%になっています。近年では、ひとめぼれやコシヒカリより実る時期が遅く、暑い夏でも品質が良いきぬむすめ（九州でつくられた品種）の面積が増加しており、令和元年には県内さいばい面積の29%になっています。さらに、令和元年には、県育成の主食用ブランド品種「星空舞」がデビューし、暑い夏でも品質が良く、コシヒカリの少し後に収穫でき、倒れにくく、味も良いことから、農家のコメ生産に活気が出てきています。



鳥取県の地域別に見た米の品種割合 [2019年 / 全農とっとり]

会社をつくって米づくりに取り組んでいる山崎さんと初田さん

山崎さんと初田さんは鳥取市気高町を中心に、約50ヘクタールの水田で大きば農業に取り組んでいます。

初めはそれぞれで米づくりに取り組んでいた2人は、もっとたくさんのお米をつくりたいと考え、1992年（平成4年）に「みどり農産」という会社をつくりました。

会社をつくってよかったところは、2人で作業をすると、1人でするよりも仕事がずいぶんとはかどるということです。今では3人の社員といっしょに、米のほかに、アスパラガスや大豆、白ねぎなどもつくっています。



山崎さんの話

地域の皆さんの役に立てるよう、機械だけに頼らず、人間力を生かした経営を進めています。あとつぎを育てながら、新鮮な野菜を消費者の皆さんにお届けし、野菜狩りイベントを通じて会社が地域の新たな交流の場になればと願っています。



初田さんの話

米を経営の柱とした大型農業機械を使って作業を効率的に行い、さらに安心・安全なお米の提供や白ねぎ、アスパラガス、里芋をさいばいして経営の安定を目指しています。私自身、一年でも長く地域と関わり、一人でも多くのあとつぎが増えてくれればと思っています。